

平成23年度 第2回 鶴岡地域審議会

次 第

日 時 平成23年8月1日（月）
午後1時30分～

場 所 鶴岡市役所
3階 議会委員会室
6階 601会議室

1 開 会

2 あいさつ

3 協 議 （全体会） ※会場 議会委員会室

（1）これまでの議論のまとめについて（資料1）

（2）その他

4 分 科 会

※会場 地域コミュニティ分科会：議会委員会室
産業経済分科会：601会議室

（1）各協議テーマの具体的な方策について

（2）その他

5 閉 会 （分科会毎）

第2回 鶴岡地域審議会 名簿

審議会委員

| No. | 所属団体・役職名等 | 氏名 | 備考 |
|-----|--------------------|----------|----------------|
| 1 | 鶴岡商工会議所 会頭 | 早坂 剛 | 審議会会長(産業経済分科会) |
| 2 | 鶴岡市町内会連合会 会長 | 山田 登 | 地域コミュニティ分科会長 |
| 3 | 鶴岡市農業協同組合 代表理事組合長 | 今野 毅 | 産業経済分科会長 |
| 4 | 鶴岡市自治振興会連絡協議会 会長 | 五十嵐 寅吉 | 地域コミュニティ分科会 |
| 5 | (社福)鶴岡市社会福祉協議会 理事 | 茅野 進 | |
| 6 | 学識経験者 | 五十嵐 松治 | |
| 7 | 鶴岡市PTA連合会 副会長 | 高山 利幸 | |
| 8 | 鶴岡市体育協会 会長 | 稲泉 眞彦 | |
| 9 | 鶴岡市老人クラブ連合会 会長 | 後藤 輝夫 | |
| 10 | 鶴岡市婦人会連合会 会長 | 斎藤 春子 | |
| 11 | 鶴岡市消防団 団長 | 阿部 和博 | |
| 12 | 学識経験者 | 今野 利克 | |
| 13 | 学識経験者 | 早坂 裕子 | |
| 14 | 鶴岡市民生児童委員協議会連合会 会長 | 竹内 峰子 | |
| 15 | 出羽庄内森林組合 理事 | 五十嵐 吉右衛門 | 産業経済分科会 |
| 16 | 山形県漁業協同組合 理事 | 本間 昭志 | |
| 17 | 鶴岡市観光連盟 会長 | 三浦 惇 | |
| 18 | (社)鶴岡青年会議所 直前理事長 | 佐藤 正廣 | |
| 19 | 学識経験者 | 本間 孝夫 | |
| 20 | 学識経験者 | 荘司 正明 | |

市役所

| No. | 部課・役職名等 | 氏名 | 備考 |
|-----|--------------------|--------|-------------|
| 1 | 企画部長 | 秋野 友樹 | |
| 2 | 企画部地域振興課地域活性化推進室長 | 吉住 光正 | 産業経済分科会 |
| 3 | 企画部地域振興課地域活性化推進室係長 | 三浦 裕美 | 地域コミュニティ分科会 |
| 4 | 企画部地域振興課地域活性化推進室主任 | 飯野 剛 | 地域コミュニティ分科会 |
| 5 | 企画部地域振興課地域活性化推進室 | 進藤 希世加 | 産業経済分科会 |

鶴岡地域審議会のこれまでの議論のまとめ

企画部地域活性化推進室

(コミュニティ分科会) (産業経済分科会)

1 防災意識の高揚と総合的な防災対策の点検・見直し

(コミュニティ分科会)

2 地域コミュニティの役割・連携の見直しと地域防災力の向上

3 高齢者、要支援者の安全・安心の暮らしの実現

4 若い世代の育成・支援と地域活動のリーダー育成

(産業経済分科会)

5 地域ネットワークによる情報の発信・展開の取り組み

6 地域の観光・産業・文化の活性化

1 防災意識の高揚と総合的な防災対策の点検・見直し

大震災を機に、本当の豊かさとは何か、自らの生活をもう一度見直すことが大切ある。このため、行政から市民への災害に関する情報提供や学習の機会の提供、防災意識高揚の催し等をもっと行ってほしい、市民との情報の共有を進めてもらいたい。

また、今回の大震災を教訓として、緊急時の避難所、交通、通信、医療機関、食糧の備蓄、インフラ整備等について、総合的に現状を点検した上で、普段からの危機管理を十分やっておかなければならない。防災計画についても、一歩進んだ、具体的な計画に見直ししてほしい。

課題

- 本当の豊かさ、本当の幸せとは何かという視点からこの大震災に向き合い、もう一回自分の生活を見直すことが非常に重要ではないか。
- 便利さ、豊かさを追求したのが一番の大きな災いであり、今回は反省すべき時期ではないか。
- 今回想定外の災害を経験してお互いに協力をする事の大切さなど、私たちが失っていた考え・想いが必要だと改めて感じた。
- いろんな面の危機管理や情報の収集について、非常時の対応がどのようになっているのかももう一度確認する必要がある。
- 今後さらに大きい余震が来る可能性があり、行政としても3月11日と4月7日の経験を生かし、その際の対応等今のうちに考えておくという緊急的な課題がある。
- 食料に対する地域の防災あるいは供給体制も含めた流通システムを、行政も含め、個人や団体でも、トータル的にシステム構築しておく必要がある。
- 庄内空港、酒田の港等の庄内地区の交通網の整備がこれからの大きい課題である。電力も含めて、インフラの整備を大事にしていかなければならない。
- 東北地方が元気を出していくためには、物資がきちんと流通しなければならない。石油とかも日本海側にきちんと配分できることが、今後は重要である。

提案

- 地域の情報が入らないということで、ボランティアの活動が非常に停滞し遅くなったということがあつたようです。行政と民間ボランティアとの情報共有が、非常に大切だと感じた。また、災害地のボランティアセンターと当地のボランティアセンターとの協力連携というのも大事にしていかなければならない。
- 地震とか津波とか原発というものの恐ろしさを、地元の大学を活かして、専門的な学習の機会や情報の提供をして欲しい。防災意識高揚の催しや情報の提供広報活動を積極的にやっていただきたい。

- 原発に対しては自主防衛がこれからも出来ることなので、最悪の事態を踏まえての情報と避難の仕方とかを鶴岡市の方からも、はっきりと明示してほしい。
- エネルギーの常々に対する使い方、浪費といった意味では、生活全般に対しての小さいときからの教育面でも、何か起きたときの対応のマニュアルを浸透させるべきでないのか。
- 震災対応がニュースで流される中で、非常時のリーダーのあり方としてどういうものが教訓として残せるのか。大震災の中で、先人の知恵とか、昔から教えられていることをきちっと見直すことが、一つ大切なことだという気がする。
- 食糧の備蓄を含めて、防災センターについて考える必要がある。また、非常時の交通、通信、医療機関、伝達、避難する場所等についての再点検や、冬期間の災害対応・ヘリポート等の総合的な行政の施策が必要である。
- ガソリンがなかった、商店に入っても入用な物が品切れであったことについてはいい教訓である。鶴岡市の防災計画も、大幅な見直しが必要であり、今後防災計画については、もっと一歩進んだ、具体的な計画がほしい。
- 防災計画をもう少し簡単にわかりやすくして、市民との情報の共有を諮っていく必要がある。

2 地域コミュニティの役割・連携の見直しと地域防災力の向上

担い手の減少により、単位自治組織では解決できない課題が増えてくることが予想されることから、小学校区単位の自治組織のあり方や単位自治組織との役割分担・連携について見直しを図っていく必要がある。

また、大災害時の情報収集・伝達とか安否確認とか町内会等で何をどうすればいいのか、また、行政、コミセン、町内会の連携をどうとっていくのか、新たな視点から見直す必要がある。このため、建物や道路、河川等、地域の防災点検や情報伝達やその機能などを含めた実践的な避難訓練等により、地域の防災力を高めるとともに、地域の連帯感を育てる好機として捉える必要がある。

課題

- コミセンと町内会の役割はどのように異なるのか不明瞭であり、地域内の各種団体の連携が十分機能していないのではないか。
- 大災害時の情報伝達とか情報収集とか安否確認とか、我々町内で何をどうすればいいのか、そしてどこに避難すればいいのか、今後、いろいろ勉強しながら解決策、対応策を考えていかなければならない。
- 町内会で防災訓練やるが、今の災害を通じて本当にこのままでいいのか。防災だけでなく、社会教育も含めたコミセンのあるべき姿、対応の仕方、それから町内会の組織のあり方を整理した上で、この連携をどうとっていくのか。

提案

- 地域コミュニティの安心・安全、安定体制については、地元にあるセンターや倉庫の点検、情報の伝達とその機能、地域の建物や道路、河川等の点検とともに、避難訓練の改善が望まれる。
- 三陸沿岸は防災意識が高い中で、あれだけの人的被害があった。地域住民の意識を高めるためにはどうすればいいのか、自主防災組織や地域の消防団を含めて考えていかなければならない。
- 訓練が一番大事なので、訓練して日頃の力をつけたいと思う。
- 毎年やっている防災訓練も、例えば夜避難訓練をすれば若い人も出てくれるだろうし、地域の連携に生かしていける。緊迫感と連帯感を育てるいいチャンスなので、是非防災が地域で生きて来るような取組みをすべきではないか。
- 市全体として11日を防災総合活動をする日というようなこともやったらいいのではないか。緊急避難時にどんな物を持ち出すかという点検も必要だし、足腰の動かない者たちが避難するのに車イスが充分あるのか等、緊急避難する場所への訓練をセットしていくようなことも必要ではないか。
- 自主防災組織というのは、旧鶴岡市内の各小学校区単位にあるが、地域の方から連携を深めるような活動をお願いしたい。
- 自主防災組織としての連携が進んでいる地域もある。防災だけでなく、地域と一体となった活動をしていきたい。

3 高齢者、要支援者の安全・安心の暮らしの実現

従来は、多世代が同居し家庭内で役割を分担したり、隣近所が助け合って生活が維持されてきたが、核家族化の進行や、近隣関係の希薄化などによりそうした機能の低下が危惧される。今後、高齢者等が安心して暮らせる生活を支えるためには、多様な組織や団体による新たな地域システムを構築する必要がある。

特に、災害時における、高齢者の一人暮らし、要支援者、これに対する対策をもう一度見直す必要がある。

課題

- 防災対応、生活交通、買い物、義務人夫、ごみの分別等、高齢者を手助けし高齢者が安心して暮らせる地域づくりが課題である。
- 個人情報保護の関係で高齢者支援も難しい状況である。施設へ入居して空き家になっても情報が入らないし、敬老会の案内名簿を作るにも、直接市役所に行く必要がある。
- 関係機関・団体との協調・協力の面において、横の連携をどう図るか。協力体制（役割分担）を確認する場が必要である。

提案

- 地域のコミュニティづくり、日常のコミュニティづくりというのが大事である。三陸の災害を聞くと、早く逃げなさいという声かけをしたところは災害がなかったと聞く。隣近所の声かけ見守り支援というのは、今後大事だろう。
- 特に高齢者の一人暮らし、要支援者これに対する対策をもう一度見直す必要がある。町内会で全部やれと言われても、実際無理な面がある。
- 個人情報保護の観点との兼ね合いを整理しながら、高齢者をはじめ要支援者の情報を地域で共有し、関係機関・団体の横の連携や協力体制（役割分担）を構築していく必要がある。
- ボランティア精神が薄れている。地域活動に消極的な人が多くなっている。ボランティアや地域を支える福祉協力員など人材の育成を図っていくような手立てを講じる必要がある。
- 民生委員の役割も重みも増す状況が生じているが、欠員補充がされない状況の中で、今回のような災害起きた時に一体どうなるのかという危惧がある。こんな時こそ福祉行政に携わる行政の力、支援が何より必要である。

4 若い世代の育成・支援と地域活動のリーダー育成

進学や就職を機に地元を離れる若者や、子どもの就学等を機に市街地に転出する世帯が多く、地域の担い手不足の深刻化が懸念される。若い世代の地元への定着を図るためには、幼少の頃から郷土愛を醸成するほか、子育てを地域の課題と位置付け、取り組んでいく必要がある。

また、地域のコミュニティ活動への担い手確保のため、活動内容の情報発信を行いながら、若い世代に参加の裾野を広め、地域活動のリーダーの発掘・育成に努める必要がある。

課題

- 若者が非常に厳しい状況に置かれている。彼らの多くは蓄えの殆どない状況にあり、今こういう状況の時こそ、やはり若い人達を、きちっと支え、若者の働く場の確保に全力を挙げていかなければならない。
- 頑張れる若者をちゃんと育て、次の世代、次の世代と引き継いでいく、その自覚が我々は今少し失いつつあるのではないか。
- やはり活性化というのは若い人がもっといないと出来ない。その辺も含めて、いろんな産業、観光を考える必要がある。
- スポーツに対する理解を深めていただき、地域の活性化、進展に供するような動きをしていく必要がある。
- 市街地の保育園は順番待ち。特に乳幼児を受け入れ出来る園が少ない。郊外地では学童保育の設置が課題である。
- 地域活動に対する住民の理解が不足している。サービスは受けたいが、担い手にはなりたくないという感情が基底にある。
- リーダーの世代交代の時期にきているので、リーダー研修が必要である。
- 話し合う機会、顔が見える活動が必要。きめ細かく（＝だれがどこで何をするか）示すことが必要である。活動事例集を活用したいし、多くの人に見てもらいたい。

提案

- 地域コミュニティにおいて、若者あるいは子育て世代を積極的に巻き込んだる活動を積極的に行い、リーダーの育成を図ってはどうか。
- 子どもたちの部活動等の情報を地域の住民が共有し、応援、顕彰する取組みを推奨してはどうか。
- 全国大会に出場するなどスポーツで活躍する子どもたちは、地域にとって明るい話題であり、地域で共有していくべき。
- 放課後の保育事業を自治組織で運営する仕組みを検討できないか。
- 三瀬小では母親たちによって人形劇が行われ喜ばれている。地域を元気にしようといういろいろな意見が出てきている。子育てするなら鶴岡といわれるようにしたい。

5 地域ネットワークによる情報の発信・展開の取組み

鶴岡では、様々な活動や事業展開、自然豊かで非常においしい産物等もたくさんあるが、それをどこに向け、何のためにやっているのかということの情報発信力が弱い。もっと横の連携を図りながら、他に発信して、もっと人を呼ぶといった動きが強まれば良い。

このためには、やはりPRが第1条件であり、交流人口を定着し活性化させるためにも、総力戦というか、まさにネットワーク、横のつながり、様々な団体・業種が連携した取組みを行う必要がある。

課題

- 業種・分野毎のネットワークはあるが、それぞれの地域・産業を結ぶネットワークがない。
- 農商工連携と言われながら、実際はその結びつきは弱い。まだ縦割りで物事が進められている。
- 市内事業者の顧客・取引先に対する、観光・物産情報の発信に取り組む必要がある。
- 全産業をつなぐ横のネットワーク化には事前の合意形成が重要。この会を種にしながら広げていく方が良い。
- 地域が一丸となって売っていくには、情報を集約化し解決していく窓口と仕組みが必要である。

提案

- 東京にある江戸屋敷（東京事務所）は、市の観光や農協の関係も産物を持ち込みながら一生懸命PRしているが、耳に入ってこない。様々な事業あるいは交流を毎年やっているのですが、もっと充実した内容を検討していただきたい。更に一歩進んだ連携、開発も重要ではないか。
- 中央に本社がある事業所も相当鶴岡にあり、かなりの社員がいるので、鶴岡の美味しいお米のパンフレットでも良いので、アピールし、今後どんどん表に打って出ていく必要がある。
- 庄内、鶴岡、酒田と言ってもわからない。ここのところで統一した名称的なもの、例えば、すべてにおいて庄内藩を入れた名称で売っていったらどうか。観光的なものに関しては、庄内藩という名称に統一していったら、見たときに庄内藩とはどういうところなのかとおのずと見方が違ってくるのではと思う。
- 鶴岡信用金庫は、全国規模の会議には鶴岡のパンフを必ず持参し、是非来てくれと言っている。商工会議所は、常任委員全員に観光大使だよと言っている。各事業所がいろいろなところで取引があると思うので、そういう人たちに宣伝するだけで、相当な観光客、製品の販売促進にも繋がっていくので、会員の皆様にも積極的に声をかけている。

- 商工会議所、農協、青年会議所、みんなネットワークの基盤を強固にしていかななくてはならない。例えば取引先に年1回請求書を送る時、資料を送る時に一緒に鶴岡の観光パンフレットを同封し一度社員旅行にどうですかというような観光とのマッチング、農協の農産物のリーフレットを送ってもらっても良いし、青年会議所のネットワークを活用するのも良い。
- 各種青年団体が集まったの情報交換、ビジネスマッチング、それぞれの団体の中では実例としてあるので、全市的に横断的にやるということは可能かと思う
- 仙台駅前にバス乗り場、庄内行きの表示、宣伝が何もない。仙台に新幹線に来て高速バスで乗り換えて庄内に来る人にとってはわかりにくい。気がついた時にそのことを市役所の観光課や会議所でもいいが、これらの情報を集めて一つずつ解決していくような窓口、仕組みなど、運動的にやらないと元気になっていかないのではないか。

6 地域の観光・産業・文化の活性化

地域の歴史・文化と環境をいかに売っていくのか、各産業を結ぶネットワークの構築、或いはこの会でも情報発信していき、もっと広めていかなければならない。商店での配達や御用聞きから生まれる異業種の連帯強化、新たなサービスの提供の可能性が考えられる。また、高齢者をターゲットにした商店街づくりも検討する必要がある。

一方、旧市の場合は一極集中も大事だが、周辺の地域性をいかに生かすべきかについても考えることが大切であり、地域にある産物の一品運動をバックアップする協力体制を考えるべきでないか。

課題

- 観光を中心とした交流人口の拡大は、全産業への波及効果が高い。
- 観光面では、とにかく先手を打った行動とか、安心・安全の庄内という取り組みが非常に大切だ。そして観光だけでなく、全ての企業産業が、こういう取り組みを強化して進めることが鶴岡の活性化にも繋がっていくのではないか。
- 旧市内が買い物難民化している。
- 中心市街地へ人を呼び込む工夫が必要である。
- 城下町らしさの復元には、中心街の施設配置、景観整備などが重要である。
- 豊かな食文化など地域の特徴として出ていない。アピールの仕方に工夫が足りないのではないか。もっと文化としての掘り下げが必要である。
- 農林業の後継者不足・サラリーマン化の問題も深刻であり、高齢者でも取り組める農業体制が必要である。

提案

- 公益文科大学が山形市を会場にして飛島の観光資源など酒田地域の情報をまとめて発信するという。山形市は、芸工大と提携して、去年の花笠まつりでは、芸工大の生徒が案を出して実施したところ、飛び入り参加が爆発的に増えたと聞いている。若い人の意見をもっと取り入れることも検討しながら、各産業を結ぶネットワークの構築を考えてもよいのではないか。
- 今、観光客はありきたりものには魅力を感じないので、この地域の歴史と文化と環境を如何に売っていくのか、庄内浜の魚もあまり量が獲れないので、こちらに取りに来てもらうとか、季節によって販売していくとか、そのような運動をもっともっと広めていかなければと感じている。

- 産直カー、産直施設、朝市への期待が大きい。買物難民に対応した民間企業の取り組みとして、県内でも生協の移動販売車が上山市、酒田市でも始まる。鶴岡でも、その考え方をまとめていく段階に来ているのではないか。
- 山王商店街でのまちキネと連携した取り組みに期待したい。
- 若者より高齢者のニーズに応えるような商店街づくりを進めたほうがよい。
- 山林地帯、中山間地域であれば、森林の文化的活動についても大事だろうと思いますし、例えば白山だだちゃ豆や湯田川孟宗のような一品運動は、地域全体の活性化につながることもなる。それぞれの地域にある産物をバックアップする協力体制として考えるべきではと思う。
- 今まで売上ということで大量に売ることが、一番のメインだった訳ですが、そういう各地域の一品運動というものを、もう一度鶴岡でやることで隠れたものが表面に出て、集まってくれば相当な数になるのではないか。各地域の隠れた産物の掘り起こしを行うには、一品運動の復活が効果的である。

コミュニティ分科会のサブテーマ「4. 若い世代の育成・支援と地域活動のリーダー育成」に関連して、地域の活動の中での若者の参加などに関する資料として、「新たな地域コミュニティづくり モデル事業報告書（第五学区・上郷地区・三瀬地区）」から、関係部分を一部抜粋したものです。

ii 「新たな地域コミュニティづくりモデル事業」生活実態調査

本事業は、平成13年度から16年度までの4年間にわたり、市街地・中山間地・海岸部の地域類型から第五学区・上郷地区・三瀬地区をそれぞれ2年間モデル地区に指定し、地域課題や住民ニーズを把握し「互いに支え合う」地域コミュニティを築くために行う地域住民自らの調査・研究活動を支援したものである。

モデル地区と指定年度

| 地域類型 | 指定モデル地区 | 指定年度 |
|------|---------|-----------|
| 市街地 | 第五学区 | 13年度・14年度 |
| 中山間地 | 上郷地区 | 14年度・15年度 |
| 海岸部 | 三瀬地区 | 15年度・16年度 |

各モデル指定地区では、客観的調査・分析作業を基に地域活動および住民ニーズを把握するため、地域コミュニティを構成する住民がどんな生活をし、何が足りないと感じ、何をして周囲の人たちの役に立ちたいと考えているかを探る「生活実態調査」を実施した。この調査では、絶えず変化する状態を把握するためには、繰り返し調査する必要があること、また調査自体が一つの住民運動であるとの認識から、「生活実態調査」を実施した翌年に、61歳以上の中高齢者を対象に、1年後の生活状況の変化を探るため、追跡調査を行った。

また、上記調査と並行し、各指定地区で6～8名からなる地域課題研究会を開催し、数値だけでは捉えきれない課題等を整理している。モデル事業の進展に伴い、地域課題研究会は、課題整理のみならず課題解決への実践を推進する大きな原動力となった。

1 生活実態調査

(1) 対象世帯及び対象者

調査については、家族形態別に対象世帯及び対象者を抽出し、家族構成によって、日常生活で困ることなどが違ってくことから、幅広く地域課題及び住民ニーズを探ることにしたものである。

各モデル地区において、家族形態を、①高齢者一人暮らしの世帯、②高齢者夫婦の世帯、③夫婦と高齢者の親からなる世帯、④親子二人暮らしの世帯、⑤親と夫婦と子どもからなる世帯（三世代家族）、⑥夫婦と子どもからなる世帯（核家族）、⑦子どものいない若夫婦二人暮らしの世帯、⑧成年一人暮らしの世帯、⑨親と夫婦と子どもと孫からなる世帯の9類型に分類し、各町内会、集落及び地区会毎に、類型別世帯が概

ね同数、若しくはそれに近い形になるよう対象世帯を抽出し、成人・高校生・中学生・小学生（五・六年生）の4階層を対象に実施した。

また、各地区について、61歳以上の中高齢者を対象に、1年後の生活状況の変化を探るため、追跡調査を行った。

調査の方法は、町内会長及び隣組長が対象世帯員に手渡し後日回収する方式とし、回収結果は下表のとおりであるが、いずれの地区についても、高い回収率となり、地域コミュニティへの関心の高さがうかがえる結果となっている。

| 地区 実施年度 | 生活実態調査 本調査 | | | 生活実態調査 追跡調査 (61歳以上) ※ 本調査の翌年に実施 | | |
|----------------|-----------------|---------------|-------------|------------------------------------|---------------|------------|
| | 対象 | 回収数 | 回収率 | 対象 | 回収数 | 回収率 |
| 第五学区 平成13年度 | 400世帯 1,079人 | 400世帯 989人 | 100% 92% | | | |
| 上郷地区 平成14年度 | 250世帯 1,027人 | 250世帯 947人 | 100% 92% | 208世帯 343人 | 205世帯 329人 | 99% 96% |
| 三瀬地区 平成15年度 | 210世帯 731人 | 206世帯 665人 | 98% 91% | | | |
| | | | | 252人 | 240人 | 95% |

(3) 調査結果

3地区の調査結果の概要は下記のとおりである。なお、各調査項目については、各地区の生活実態調査報告書を参照願いたい。

○ 第五学区

【成人】

「住まい」としての町の評価は、高齢になるほど高くなる傾向を示しており、全体としては76%が「住み続けたい」と考えている。「今後も住み続けたい」理由として「町内に愛着を持っている」が25%と最も高く、「買い物が便利」、「静かで落ち着いている」、「交通の便が便利」が次いでいる。逆に「できれば住みたくない」は、全体の8%となっているが、その理由は「敷地が狭い」、「騒音がする」、「町内会の活動が苦痛」、「親しい友人が近くにいない」となっている。

住環境の利便性の高さを「プラス」として評価する一方、「マイナス」評価として近隣関係や人間関係に充足していない状況が見取れる。また、「町内会は必要」と8割以上が回答しており、地域活動への認識の高さがうかがえる。

将来の生活への不安要因として、「自分の老化」(24%)、「自分や配偶者の健康問題」(14%)、「家族の病気や怪我」(13%)を挙げており、健康の維持が大きな関心事となっている。さらに、日常生活の自立度を問う「ゴミの運搬」、「除雪」については、70代以上の20%が「できない」と回答しており、何らかの支援が必要な状況を裏付ける結果となっている。

「町内会の役員を引き受けること」や「町内会の事業への参加」について、50代は低い数値を示しており、特に働きざかりの世代が地域活動からやや疎遠となっている状況が見受けられる。

また、防災への関心を問う項目に関しては、「避難場所が分からない」が25%、「防災訓練に参加したことがない」が76%となっており、認知度向上の対策が必要な結果

となっている。

○ 上郷地区

【成人】

「住まい」としての集落への評価は、高齢になるほど高く、全体としては65%が「住み続けたい」と考えている。ただし、20代、30代で「できれば住みたくない」人は3人に1人の割合で、「分からない」人を合わせると半数ぐらいになる。「今後も住み続けたい」理由として「持ち家があるので」が44%と最も高く、「先祖伝来住んでいる」40%、「自然に恵まれている」37%、「住み慣れた」「集落に愛着を持っている」が30%を超えている。逆に「できれば住みたくない」は、全体の16%となっているが、理由として「買い物に不便」「交通の便が悪い」「医療機関が遠い」となっている。住み慣れた住環境を評価する一方、日常生活を支える利便性が満たされていないと考えている状況が見て取れる。

自治会（集落）については、「全く頼りにしない」が全体の14%に過ぎず、「住民同士の交流」45%や「連帯を深める」43%、「課題解決」37%、「住民要望」30%のため必要と回答しており、重要と認識している。

将来の生活への不安要因として、「自分の老化」46%、「家族の病気や怪我」45%、「自分や配偶者の健康問題」35%を挙げており、地域住民座談会報告書や第五学区の調査とほぼ同様の結果となっている。（なお、上郷地区では複数回答可としており、単純な数値比較はできない。）

さらに、「ゴミの運搬」については、70代18%、80代以上39%が、「除雪」についても70代19%、80代以上52%が「できない」と回答しており、第五学区同様、何らかの支援が必要な状況を裏付ける結果となっている。

「自治会の役員」については、「断る」が28%で、第五学区の36%に比較し低い比率にとどまっており、青壮年層（30代42%、40代41%、50代32%）でも「まわり番なら仕方ない」とする比率が高い。（第五学区では30代28%、40代24%、50代31%）

また、防災に関しては、「避難場所が分からない」人、「防災訓練に参加したことがない」人がそれぞれ48%となっており、特に20～40代が低い数値を示している。

○ 三瀬地区

【成人】

「住まい」としての地区の評価で、「住み続けたい」という人の比率は、高齢になるにつれて高く、全体では77%となっている。但し、20代から40代では「できれば住みたくない」、「分からない」を合わせると5人に1人ぐらいの割合になる。

「住み続けたい」最も大きい理由としては「自然に恵まれている」が50%と高く、「持家がある」44%、「住み慣れた」41%、「地区に愛着をもっている」30%の順となっている。また、「できれば住みたくない」と答えた最も多い理由は「医療機関が遠い」65%であり、次いで「買い物に不便」56%、「交通の便が悪い」33%、「通勤に不便」26%、「公共施設が遠い」21%となっており、山海の自然に恵まれた住環境を評価する一方、地理的要件に起因する生活上の不便さを指摘する声も多い。

なお、「住み続けたい」が77%は、第五学区より2ポイント、上郷地区より12ポイント高い。

地域活動について、「内容によって」36%、「いざという時」21%、「何かにつけて」

11%を合わせ 68%の人が何らかの形で自治会を頼っており、「地域課題を解決」38%、「住民同士の交流」37%、「住民同士の支援、連帯」36%、「住民の要望」30%のため、自治会は必要な存在と認識している。

将来の生活については、「家族の病気やけが」45%、「自分や配偶者の健康問題」、「自分の老化」がそれぞれ 40%、不安を感じている。「ゴミステーションへのゴミの運搬」については、70代の 80%近く、80代以上の 44%が運べる状況にある。

高齢者世帯支援のためのボランティア対応については、有償、無償あわせ 58%が賛成し、反対も極めて低い数値（1%）となっており、近隣の高齢者世帯等の現況を十分に把握し、場合によっては、地域活動として取組みを検討することも必要ではないかと考える。

「除雪」については、70代 15%、80代以上 50%の人が「何もできない」と答えているが、海岸部で雪降しや除雪の機会が極めて少ないためと思われる。

「自治会の役員」については、34%の人が「断る」と答えており、第五学区 36%に比べ若干低い、上郷地区 28%に比べると高くなっている。また、「まわり番なら仕方ない」と答えた比率も 30代 33%、60代 43%とかなり高い比率となっている。

「自治会（地区会）の事業」には、「参加しない」が 25%に止まり、「時間の許す限り参加する」が 30代から 60代は 30%を超える比率となっている。

「ボランティア活動の参加経験」については、「ある」と答えた人が 64%と半数を大きく超え、第五学区 41%、上郷地区の 61%を上回っている。

また、防災に関して、避難場所が「分かる」63%が「分からない」21%を大きく上回っている。ちなみに第五学区と上郷地区の「分かる」はそれぞれ 72%と 44%となっている。「防災訓練」には、20代から 40代の半数以上は「参加したことがない」という結果が出ている。

「平日の日中誰が家にいますか」では、「誰もいない」10%は極めて少ないが、「高齢者のみ」と「高齢者と（ ）」答えた人の合計が 67%に達し、高齢者が留守を守っている状況である。

「平日の日中」の心配ごとについては、「火災」、「地震等の災害」、「誰かが急に具合が悪くなる」の順に不安を抱えていることが分かる。

○モデル3地区「生活実態調査」の全般的傾向について

日常生活の基本的行動については、概ね自分のことは自分で行える状況であることがうかがえる結果となった。しかし、この状況がどれ位続くのか、状況の変化を探りながら地域において的確な対応を行っていく必要がある。

なお、3地区の主な調査結果について、下記のとおり比較する。

問 あなたは、町内会の役員を頼まれたときにどうしますか。

| | | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80以上 | 計 |
|-----------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|----|
| 積極的に引き受ける | 第五学区 | 2% | 1% | 7% | 4% | 2% | 2% | 2% | 3% |
| | 上郷地区 | 0% | 4% | 2% | 6% | 2% | 1% | 0% | 2% |
| | 三瀬地区 | 5% | 2% | 2% | 4% | 0% | 0% | 0% | 2% |

| | | | | | | | | | |
|-------------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 内容により引き受ける | 第五学区 | 7% | 20% | 20% | 15% | 17% | 12% | 8% | 14% |
| | 上郷地区 | 17% | 13% | 17% | 17% | 13% | 11% | 2% | 14% |
| | 三瀬地区 | 27% | 16% | 28% | 16% | 11% | 8% | 2% | 15% |
| 時期がくれば引き受ける | 第五学区 | 4% | 13% | 7% | 13% | 3% | 2% | 1% | 6% |
| | 上郷地区 | 9% | 7% | 18% | 18% | 7% | 1% | 0% | 10% |
| | 三瀬地区 | 14% | 18% | 12% | 11% | 2% | 1% | 0% | 7% |
| 誰も引き受けない時は仕方なく引き受ける | 第五学区 | 0% | 6% | 6% | 3% | 6% | 2% | 1% | 4% |
| | 上郷地区 | 6% | 4% | 4% | 3% | 3% | 0% | 2% | 3% |
| | 三瀬地区 | 5% | 4% | 8% | 4% | 0% | 2% | 0% | 4% |
| まわり番なら仕方ない | 第五学区 | 31% | 28% | 24% | 31% | 32% | 24% | 11% | 24% |
| | 上郷地区 | 19% | 42% | 41% | 32% | 31% | 12% | 7% | 29% |
| | 三瀬地区 | 5% | 29% | 20% | 24% | 37% | 19% | 10% | 21% |
| 年数が決まっているなら引き受ける | 第五学区 | 0% | 2% | 2% | 1% | 2% | 0% | 1% | 1% |
| | 上郷地区 | 2% | 1% | 3% | 2% | 1% | 0% | 0% | 1% |
| | 三瀬地区 | 0% | 4% | 7% | 1% | 0% | 1% | 0% | 2% |
| 一定の年齢でやめることができなければ引き受ける | 第五学区 | 0% | 1% | 2% | 0% | 0% | 2% | 0% | 1% |
| | 上郷地区 | 2% | 1% | 1% | 3% | 3% | 3% | 0% | 2% |
| | 三瀬地区 | 0% | 0% | 0% | 2% | 6% | 5% | 0% | 2% |
| 断る | 第五学区 | 49% | 24% | 29% | 30% | 34% | 37% | 56% | 36% |
| | 上郷地区 | 40% | 23% | 12% | 13% | 26% | 45% | 59% | 28% |
| | 三瀬地区 | 41% | 22% | 18% | 26% | 35% | 42% | 57% | 33% |

3地区とも「断る」とする回答が最も多い。特に、20代で4割以上、30～50代においても20～30%の人が「断る」と答え、青壮年層の関心が薄い。これからの町内会等を担う世代の人材育成が難しく、活動の停滞に繋がらないか懸念される。引き受ける場合でも、「まわり番なら仕方ない」と消極的である。

問 あなたは町内会（自治会・地区会）事業に参加していますか。

| | | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80以上 | 計 |
|---------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| 時間の許す 限り参加 | 第五学区 | 9% | 29% | 27% | 28% | 23% | 25% | 14% | 23% |
| | 上郷地区 | 6% | 35% | 54% | 50% | 31% | 25% | 2% | 35% |
| | 三瀬地区 | 24% | 37% | 39% | 31% | 20% | 19% | 13% | 28% |
| 内容を決め て参加 | 第五学区 | 7% | 26% | 29% | 17% | 26% | 26% | 13% | 22% |
| | 上郷地区 | 17% | 30% | 24% | 21% | 38% | 30% | 13% | 26% |
| | 三瀬地区 | 8% | 20% | 23% | 25% | 33% | 27% | 14% | 23% |
| 気がむいた ら参加 | 第五学区 | 20% | 18% | 16% | 10% | 15% | 7% | 7% | 12% |
| | 上郷地区 | 17% | 14% | 11% | 18% | 15% | 12% | 9% | 14% |
| | 三瀬地区 | 27% | 29% | 26% | 16% | 15% | 12% | 7% | 18% |
| 参加しない | 第五学区 | 62% | 24% | 26% | 41% | 34% | 34% | 56% | 37% |
| | 上郷地区 | 57% | 19% | 10% | 8% | 10% | 26% | 50% | 20% |
| | 三瀬地区 | 35% | 12% | 11% | 18% | 19% | 32% | 55% | 25% |

第五学区は他の2地区に比較し、「参加」と回答する率が低く、参加しない人が約4割を占めている。特に20代は62%と高い率で参加しないと答えている。また、これからの地域の担い手として期待される50代も参加しない人が41%と高い比率になっている。

問 あなたは、学区あるいは町内会の防災訓練に参加したことがありますか。

| | | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80以上 | 計 |
|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| ある | 第五学区 | 11% | 13% | 15% | 24% | 26% | 29% | 23% | 21% |
| | 上郷地区 | 13% | 25% | 38% | 60% | 58% | 58% | 21% | 44% |
| | 三瀬地区 | 5% | 27% | 43% | 51% | 52% | 56% | 26% | 42% |
| ない | 第五学区 | 89% | 87% | 83% | 73% | 71% | 66% | 72% | 76% |
| | 上郷地区 | 81% | 75% | 58% | 38% | 29% | 31% | 48% | 48% |
| | 三瀬地区 | 86% | 65% | 51% | 31% | 30% | 29% | 43% | 43% |

第五学区については、他の調査項目で防災組織について81%の人が必要と答えている一方、防災訓練に「参加したことがない」が76%と、4分の3の人は参加したことがない状況となっている。特に、20～40代では80～90%が「参加したこと

がない」と回答している。

また、他の2地区も「参加したことがない」が半数近く、年齢が若いほど参加率が低い傾向にある。このような状況では、災害が発生した場合の対応に大きな不安がある。

生涯学習推進員について

1 目的

鶴岡地域のコミュニティセンター（以下「コミセン」という。）並びに藤島地域、羽黒地域、櫛引地域、朝日地域、温海地域の各公民館（以下「地域公民館」という。）における市民の多様な学習活動や交流活動などの生涯学習事業に関し、運営組織等と連携を図りながら、事業を企画・実践するとともに、広く住民の参加を奨励し、よりよい地域づくりに資することを目的とする。

2 役割

(1)内容

- ①鶴岡地域のコミセンや地域公民館と連携した生涯学習事業の実施及び住民の生涯学習活動支援に関すること。
ア各種社会教育、生涯学習事業の企画立案
イ各種社会教育、生涯学習事業への参画と住民参加の奨励
ウ各種社会教育、生涯学習事業における連携事業などのコーディネート
- ②住民に対する生涯学習に関する情報収集、情報提供に関すること。
- ③住民の求めに応じた、学習相談や指導・助言等の関すること。
- ④教育機関等が実施する研修への参加など自己研鑽に関すること。
- ⑤その他、生涯学習の振興に関すること。

(2)活動の範囲

- ①コミセン又は地域地区公民館が実施する事業に参画する。
- ②鶴岡地域、藤島地域、羽黒地域、櫛引地域、朝日地域、温海地域それぞれ地域の全体事業として実施する事業に参画する。
- ③市全域に係る事業に参画する。
- ④小学校、中学校、地域等との連携事業に参画する。
- ⑤その他、必要に応じて実施する生涯学習事業に参画する。

3 人数

■地域別人数

| 区分 | 鶴岡 | 藤島 | 羽黒 | 櫛引 | 朝日 | 温海 | 合計 |
|--------|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 配置地区数 | 21 | 5 | 5 | 1 | 3 | 1 | 36 |
| 定数 | 126 | 26 | 20 | 15 | 16 | 22 | 225 |
| H23 人数 | 86 | 26 | 20 | 15 | 16 | 9 | 172 |

鶴岡ふるさと観光大使について

【鶴岡ふるさと観光大使の設置のねらい】

この「鶴岡ふるさと観光大使」は、本市在住者、出身者をはじめ本市に縁のある方々を通じて、本市の観光の魅力を広く国内外に紹介し、本市観光の振興を図ることをねらいとしております。

【鶴岡ふるさと観光大使の活動内容等】

(活動内容の内容)

- (1) 本市の観光広報活動に関すること
- (2) 本市の観光推進に対する意見、提言
- (3) その他本市の観光振興に関すること

(市から大使の方々への活動支援)

- (1) 名刺の交付
- (2) 本市の観光広報活動に必要な観光情報等の提供
- (3) 意見交換会の開催
- (4) その他観光大使が活動を行うために必要と認められる支援

(任期)

観光大使の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(初回の任期は24年3月31日まで)

【委嘱予定者】

- (1) 市内に活動拠点があり、本市の魅力を広く紹介できる方
- (2) 首都圏をはじめ市外に活動拠点がある方や本市に縁がある方で、本市の魅力を広く紹介できる方
- (3) 本市に縁のあるタレント、スポーツ選手をはじめとする著名人の方等

鶴岡ふるさと観光大使名簿（平成22年度委嘱）

1. 市内に活動拠点がある方

| No. | 氏名 | 所属・会社名等 | 役職名 |
|-----|--------|---------------------------|---------|
| 1 | 宇生 雅明 | 庄内映画村株式会社 | 代表取締役社長 |
| 2 | 大島 文雄 | 株式会社出羽庄内地域デザイン | 代表取締役社長 |
| 3 | 大島 美恵子 | 東北公益文科大学名誉教授 財団法人日本科学協会会長 | |
| 4 | 奥田 政行 | アル・ケッチャーノ | オーナーシェフ |
| 5 | 菅野 隆二 | ヒューマン・メカ・ロム・テクノロジーズ株式会社 | 代表取締役社長 |
| 6 | 佐藤 賢一 | 直木賞作家 | |
| 7 | 菅原 亨 | 東北電力株式会社 鶴岡営業所 | 所長 |
| 8 | 冨田 勝 | 慶應義塾大学先端生命科学研究所 | 所長 |
| 9 | 早 寄 弘 | 山形日産自動車販売株式会社 | 代表取締役社長 |
| 10 | 森岡 國男 | ルネサス山形セミコンダクタ株式会社 | 代表取締役社長 |

2. 市外に活動拠点がある方

| No. | 氏名 | 所属・会社名等 | 役職名 |
|-----|--------|--------------------------|------------------------|
| 1 | 赤川 れいか | アルバトロス音楽出版 | 歌手 |
| 2 | 石川 牧子 | 株式会社日テレイベントス常務取締役兼日テレ学院長 | |
| 3 | 大 泉 正 | 首都圏庄内あさひ会事務局長 | 事務局長 |
| 4 | 太下 義之 | 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) | 経済・社会政策部 社会戦略研究グループ |
| 5 | 岡田 茂樹 | キビソプロジェクト | プロデューサー |
| 6 | 落 合 良 | 財団法人せたがや文化財団 | 顧問 |
| 7 | 北岡 ひろし | オフィス キタオカ | 歌手 |
| 8 | 齋藤 有三 | 有限会社 エス・フィールド | 代表取締役 |
| 9 | 佐藤 幸雄 | トラットリアロアジ | オーナーシェフ |
| 10 | 須藤 玲子 | 東京造形大学 | 教授 |
| 11 | 垂水 有三 | 株式会社 高研 | 代表取締役社長 |
| 12 | 月尾 嘉男 | 東京大学名誉教授 | |
| 13 | 鐵 矢 匡生 | 鐵矢工業株式会社 | 代表取締役 |
| 14 | 中井川 茂敏 | 社団法人山形県スポーツ振興21世紀協会 | ゼネラルマネージャー |
| 15 | 宮 田 満 | 株式会社 日経BP | 医療局主任編集委員 |

(順不同・敬称略)

買物支援事業（移動店舗事業）について

H23.8.1第2回鶴岡地域審議会

2011.4.25 生協

1. 事業の目的

生協の新しい事業として、買物に困っている方々へのお役立ちや、中山間地の買物に不自由な高齢者に対する支援を行ないます。

2. 地域の選定

- ①高齢化率が高い地域、一人暮らし高齢者の割合が多い地域から開始します（山形県のデータ）。
- ②1号車を南陽市と上山市ではじめました。冬期間からの稼働でしたが、地区長さんや地域の皆さんからの暖かいご協力も得て順調にスタートしました。現在約350名の方がご利用しています。
- ③2号車は、酒田市と遊佐町の、集落に商店がない（少ない）地域を中心に活動します。

3. 1号車の利用者の声

- ①鮮度のいいおいしい食品が安い価格で利用できるようになった。
- ②重いものを遠くから買わなくても良くなった。米などは家まで配達してくれてありがたい。
- ③免許を返納したのでどうしようか困っていたので、来てくれてよかった。
- ④頼めば何でも持ってきてくれるので助かっている。
- ⑤みんなが集まるので、おしゃべりができていい。久しぶりに会えてうれしい。
- ⑥一人暮らしの方の安否確認にもなる（民生委員さんより）。

4. 運営について

- ①5月16日（月）からの運行開始を目指して準備をすすめています。
- ②月曜日から金曜日の週5日間の運行で、土、日、年末年始（31日～3日）はお休みにします。お伺いするのは週1回になります。
- ③商品は生鮮品、惣菜、野菜、お菓子、調味料、日用品など約600種類を積んでお伺いします。
- ④商品の価格は「酒田こぴあ」の価格と同じです。お買い得品もたくさん積んでいきます。ただし、5%還元とポイントカードは行ないません。
- ⑤お役に立つことが最大の目的ですので、利用者の皆さんとの会話や聞き取りを大切にして、信頼してもらえようにします。
- ⑥一人暮らし高齢者への安否確認や、身体にご不自由がある方への重いもののお届けなど、配慮を行いながら活動します。
- ⑦あらかじめ時刻表を配布します。また、停留所に近づくと生協の軽快な音楽を流します。
- ⑧撤退をすることはできませんので、事業として成り立つようにする必要があります。地域の皆さまのご支援を心から願います。

5. 停留所の場所設置について

- ①酒田市の「酒田こぴあ」から1時間以内で行けるエリアにします。
- ②コースおよび停留所は、ご要望のある地区を優先して設定します。
ただし、地区内に食料品店があったり、移動販売をやっている方がいて影響が出る可能性がある場合などは遠慮する場合があります。
- ③停車時間は1ヶ所おおよそ30分を予定します。その時間でお買物をしていただきます。ただし、たくさん来ていただければ時間を延長します。

6. その他のお願い

- ①毎週1回30分程度の時間、トラック（階段の部分含む）が駐車できるスペースがある場所をご紹介下さい。地区の皆さんが集まりやすく、冬期間も駐車できる場所を探しています。
- ②地区の皆さんへの案内に、回覧板を使わせて下さい。時刻表や時間変更などをお願いします。